【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　英語教授学領域
南部　みゆき

【論　　文　　題　　目】
会話コーパスを利用した看護師と患者間の言語コミュニケーション研究
—特徴語･会話構造･ポライトネスを中心とした分析と看護英語教育への応用—

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、看護師へのニーズ分析及び包括的な先行研究を踏まえた上で、コーパス・ジャンル分析による看護師・患者の言語コミュニケーション研究を、英語圏の看護師と患者間の会話コーパスの定量的・定性的分析により行ない、研究成果を看護英語教育のシラバスデザインに応用することを目的としている。

本論文は、日本人看護師を対象とした、看護英会話に関する質問紙調査(237 名対象)及び患者への対人的配慮に関わるフォーカスグループ・インタビューに基づき、量的・質的なニーズ分析を行っている。

先行研究を踏まえ、看護師・患者間の制度的会話の様な特殊目的コーパスは小規模でも意義があることを述べ、コーパスのレジスター(言語使用域)分析による定量的研究とジャンル・Move 分析の視点による会話構造分析等の定性的研究に基づいた研究方法を提示しているが、看護師・患者間の会話コーパスに基づく研究は、先行研究には見られない先駆的研究としての意義があるといえる。また、impoliteness は、新たな視点として近年の politeness 研究で注目されているが、本論文における、患者からの非礼な意見・態度としての impoliteness への対応に関する詳細な事例分析と考察は、未開拓の研究である。

英語圏の病院で収集されたデータから成る約 2 万 4 千語の英語を媒介とした N-P コーパス(看護師・患者間の会話コーパス)に基づいて、語彙頻度分析、特徴語の抽出とともに、コロケーション分析による共起語、n-gram 分析による lexical bundle、KWIC 検索によるコンコーダンスの抽出・分析を行っている。結果として、1 人称・2 人称代名詞と許可・可能性や意志決定を表す法助動詞の間の共起性及びそれらの共起表現の politeness ストラテジーとしての使用とともに、lexical bundle の 4 語表現に、意志・予測等の態度的スタンスを表す表現、politeness に関わる表現、看護的な特殊用語等が多いことが判ったとしている。全体的に、綿密な量的コーパス分析を多角的に行っており、看護師の発話の特徴を明らかにしている。

会話構造分析では、ジャンル分析により、コーパスデータを「面接型」「病室訪問型」「病室外型」の 3 つの場面のタイプにカテゴリー化し、タイプ毎に談話標識・隣接対の観点から politeness ストラテジー等を事例分析するとともに、Move 分析も行い、話者交代・会話の流れを明らかにしている。また、発話行為を VRM(Verbal Response Mode)により、意味と意図の観点から量的に分析し、会話場面のタイプ毎に politeness ストラテジーとも関連付けて考察している。さらに、患者の impoliteness への対応については、肯定的理解・説得が中心であり、結果として看護師の face の保持として働いているとしている。

看護英語教育への応用では、既存の看護英語教材のシラバス分析及び共起表現・politeness 等のコーパス分析の成果を踏まえ、言語データの検索による学習である DDL(Data-driven Learning; データ駆動型学習)に基づく語彙シラバスを提示している。また、DDL を補完するために、ジャンル・Move 分析の成果を活かし、会話構造・コンテクストを重視したジャンルアプローチに基づいたシラバス・教材を提案している。

本論文が、従来の会話分析の枠組みに加えて、会話構造分析へのジャンル分析の援用により、看護会話を実際のコーパスに基づいて場面別にカテゴリー化している点は先行研究には見られず、看護英語教育のシラバスデザインにも寄与しているといえる。また、看護師の性別・年齢・勤務歴等の変数を考慮した研究は今後の課題であるが、看護会話における politeness の分析・考察を、共起性・lexical

bundle の分析や VRM 分析等の定量的コーパス分析だけでなく、impoliteness 等の観点からの定性的な事例分析の方法により深化させている点は、研究上の意義があると考えられ、今後の politeness 研究にも示唆を与えている。さらに、詳細で説得力のある看護英語教育のシラバスデザインを提案している点も十分に評価できる。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成２３年１月１８日(火)に、社会文化科学研究科長室において、審査委員５名の参加のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表がなされた後に、口頭試問が行なわれた。学位論文の成果及び関連領域の学識に基づいた応答が適切になされ、申請された学位論文が学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査　山下　徹
委員　合田　美子
委員　福澤　清
委員　千島　英一
委員　荻野　藏平